

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第6回

神々のアーキテクチャ——古代アンデスの聖なるモノたち、その構成原理と表現

日時：2015年3月28日(土) 13:30-15:00

講師：鶴見英成（東京大学総合研究博物館 助教／アンデス考古学）

建築博物教室レポート

本報告では、去る2015年3月28日(土)に開催された建築博物教室第6回「神々のアーキテクチャ——古代アンデスの聖なるモノたち、その構成原理と表現」の様相をお届けする。

講演では鶴見氏のプロフィール紹介から始まり、東京大学によるアンデス考古学の沿革に触れ、半世紀にわたる成果の蓄積とそれを支えた研究者たちの功績を確認した。

本題に入ると、まず基礎的事項2点に言及した。第一に、アンデス地域の気候である。標高による植生の推移といった高山地域特有の自然環境がアンデス文明形成の土台となったことが指摘された。第二に、文明の特徴と研究手法についての説明があった。その最も特徴的な点として、古代アンデス人が文字を持たなかったことが挙げられる。これが研究を進めるうえで大きな障害となったという。こう述べると次のように思われる読者の方々もいらっしゃるであろう。すなわち、アンデス人に関する歴史史(資)料は現存するし、縄の結び目や色の組み合わせによって数を記録する手法を彼らは有していたのではないか、という反論である。一見すると、正鵠を得たご指摘のように思われるが、かかる古記録類はインカ帝国(15~16世紀)を征服したスペイン人によって作成されたものに限られるために記述の不正確さは否めない。また、いくら縄を駆使しても抽象的概念を表現するには当然限界があったから、調査対象を多角化することで情報不足を補う必要に迫られる。

だからこそ、発掘された遺物や諸造形物に刻まれた表現手法や意匠を精緻に分析していくことで、それらに込められた意味や思想を読み解き、ひいては文化を規定ないしは統御する構成原理(=アーキテクチャ)をも剔抉することに繋がるのだ。これまでの研究を通じて、神々の存在が古代アンデス人にとって大きな意味を持っていたことは間違いないとされている。この点につき、歴史史料からは、インカ帝国では人間の姿をした人格神のみならず自然の風物にも神格が認められたことが明らかにされている。この記述の信憑性は様々な遺跡の調査から裏付けられており、実際に山や岩が信仰の対象とされていたことが確認されている。

以上から、本講演が「神々のアーキテクチャ」と題した理由をご理解いただけたと思う。講義は次のように進行した。前半ではインカ帝国以前の各文化特有の表現方法について時期を遡りながら、その構成原理について解説を加えていった。後半では形成期(紀元前3000~50年)を対象にして、具体的な遺跡・遺物により着目して進めた。以下では、それぞれについて概略を紹介していく。

まず、中期シカン文化(10~11世紀)について。元来、同文化では、シカン王と同一視されたシカン神が信仰されていたが、その信仰は永続的ではなかった。すなわち、相次ぐ旱魃と洪水といった自然災害を経験することで、信仰の絶対性は動揺し、遂には神殿が破

壊されるに至ったのである。こうした変化は何も人々から宗教が完全に失われたことを意味しなかった。むしろ、捨てられた神がいる一方で、おそらく新たに信仰対象となった神が生まれたのだ。人々は神々を選択的に受容していたのである。

次に、ナスカ文化（1～6世紀）について。同文化では、ナスカの地上絵が有名である。そもそも、なぜ地上に描かれる必要があったのかという素朴な疑問が浮かぶが、これは素朴どころか、むしろ信仰の態様の核心に迫る疑問なのである。地上絵は天空に向けて発信されたものであって、地上に存在する神を対象とはしていなかったこと考えるのが合理的であろう。

続いて、モチエ文化（1～7世紀）について。同文化では、様々な動物が擬人化されたり神格化されたりした。例えば、ジャガーのような猛獣と人間が混合した半獣型の神の造形物が発掘されている。また、現代人からすれば駆除の対象でしかないムカデもモチーフになっていたから驚きである。人々は何かしらの霊的ないしは超人間的な力を動物に感じていたのは確実であったといえる。

後半では、世界遺産に登録されているチャビン・デ・ワントル遺跡（チャビン文化）からテーヨのオベリスク（前1000年頃）を取り上げた。オベリスクはカイマンの体の各部位をモチーフにして、それらを組み合わせて作成されたようで、カイマンをモチーフとする造形物は多く発掘されている。さらに、特筆すべき点として、作成者の空間認識が挙げられよう。すなわち、彼らは3次元の物体を立体的に表現するのではなく、さながらカーペットや絨毯にされたトラのように、立体を展開図に落として2次的に表現する手法を好んだのだ。そうすることで、本来見えないはずの部位であっても、レントゲン写真で体内内部を撮影するように、あらゆる物を平面に表現することが可能となった。

他にも、耳のあるヘビやカエル、さらに双頭のクモもよく見られたデザインであった。おそらく、カエルとクモに関しては、毒カエルと毒クモであろうと推察され、冥界への媒介的存在として認識されていたと考えられる。事実、後者については、籠の中に入った大量の首も描かれていることから、説得的である。講演では、宗教芸術の暴力と死の表現に満ちた好例としてクントゥル・ワシ神殿（前800年頃）の大石彫（本講演チラシに印刷されている）が紹介された。この獣人像はジャガー、毒グモ、ヘビが融合した姿をしているだけでなく、切断した首が抱えられている。生首が広範に受け入れられた表現であったことがここでも確認できる。なお、映像だけでなく、鶴見氏の劳作模型も披露され、ギャラリーから好評を得た。

コトシュ遺跡からはアンデス文明最古の宗教芸術とされる「交差した手」（前2000年頃）を取り上げた。これは切断された男女の手を交差させたレリーフで、人身供儀と関連が窺われる。こうした生々しい場面を描いた遺物は他の遺跡からも出土する。例えば、ほぼ同時代のセロ・セチン遺跡からは、切断された首やくり抜かれた眼球を描いた凄惨な場面を描いた彫刻も発見されており、人身供儀が主題であったと考えられている。

さて、そろそろ紙幅も尽きてきた。最後に、現代との比較を交えつつ古代人の信仰についてまとめて締めくくりたい。これまで縷々紹介してきた各文化において、人々の信仰を主導したのは神官であったと考えられている。この事実のみを斟酌すれば、信仰の在り方が多分に政治的な側面を有していたことに気づく。だが、当の本人たちにとって、神殿建造への参加が神事として見做されていたと考える方が適切である。無論、技術的観点から

すれば、作業中に死者を出したと思われるほど危険極まりない作業であったにもかかわらず、彼らは積極的に神殿建設に参加した。一見すると無謀なようにも感じられるが、神事の最中での死はむしろ名誉なことであったからこそ、民衆に神事が抵抗なく受け入れられたと理解する方が自然であろう。これは現代においても、負傷者を出すことも厭わないどころか、逆にそれを楽しむ一部のカーニヴァルが有する独特な祝祭的空間ないしは狂乱的空間と相通じるといえよう。こうした心性の普遍性は非常に興味深い。

講演当日は建築博物教室史上最高の来場者の動員に成功した。ギャラリーからの活発な質疑応答もなされ、講演終了後も止まなかった。今後の建築博物教室のさらなる発展を願うばかりである。

(青木太一／小石川分館学生ヴォランティア)